

掌編賞次点作品

夏の思い出

たっちゃん

たかしくんは、小学校四年生です。夏のある日のことです。たかしくんは、トイレに入りました。絶望しました。

一般的にトイレで絶望するといえば、そう、トイレットペーパーが無い時ですね。しかし、今日たかしくんはトイレットペーパーが無いこと以外にも、トイレで絶望できることを知りました。

一体何が起こったのでしょうか。便座に腰を降ろし、ふと右を向いてみました。そこには日替わりカレンダーがかかっています。8月30日、と可愛らしい風鈴のイラスト共に刻まれています。たかしくんのお母さんはママな人なので、毎日慣用句カレンダーをめくります。そのことをたかしくんは知っていました。

「おかあさん！ 今日って8月30日!？」

人はえてして現実を知らながらも確認せざるを得ないことがあるものです。彼が今まさにその時でした。こうやって人は大人になっていくのですね。

そうじゃないかしらー、と台所から声が帰ってきました。たかしくんのお母さんが急激なボケ化が始まり、今日の日付すらわからないという可能性に賭けて、たかしくんはテレビをつけました。

『今日のニュースです』

テレビのメニュー画面を押します。そこには時刻と日付が出てくるのですが、そこにはなんと、8月31日と書かれています。たかしくんは賭けに勝ちました、そうです、たかしくんのお母さんは急速なボケ化により今日の日付を勘違いしていたのです。わずかな可能性をたかしくんはくぐり抜けたのです。

勝ったはずのたかしくんは、人生で初めて膝をつきました。試合に勝って勝負に負けた、という奴です。世の中、勝つことが全てじゃないということを日付により学ぶことができましたね。稀有な体験です。

さて、8月31日と言えばなんでしょう。一般的には夏休みが終わってしまう日ですね。たかしくんは一般的な少年ですから、夏休みが終わってしまう日に絶望していたのです。ただ、その絶望具合が一般的な小学生とは違う表情ですね、これは修羅です。修羅の顔です。なぜでしょうねえ。

なんと、たかしくんは夏の風物詩の一つである夏休みの宿題を彼は何一つ手をつけていなかったのです。そう、何一つです。

ここで一つの疑問が起りますね、毎年夏休みの宿題は出ているはずですが、それなのに、たかしくんは学習しなかったのでしょうか。

実はたかしくんには、お兄さんが居ました。しかし、たかしくんのお兄さんはもう居ません……。彼のお兄さんは、東京の大学へ進学したため、居ないのです。死んでたりはしません。ママなお母さんの性格を受け継いでいたお兄さんは、割りとママに宿題をこなすお兄さんでした。ですから、たかしくんの宿題も見てあげてたのです。

ですが、今年は違います。という訳で、宿題に何一つ手を付けていなかったのです。

時計を見ます。昼の一時です。お昼前に起きて、もそもそと昼ごはんを食べるといいう、クズニートさながらの生活を送っていたたかしくんに、残された時間は少ないです。

一先ず、たかしくんは自分の部屋に戻りました。小学校四年生風情で自分の部屋とは生意気ですね。そして、机の上に山積みになっていた宿題の山を床に広げてみます。現状の把握を図ります。

日記、読書感想文、夏休みの友、自由研究。これが彼に与えられた試練でした。

日記に手を伸ばしました。パラパラとめくると、なんと、10日くらいまで書いてありました。自分が覚えてなかっただけで、意外と書いてたのです。たかしくんは過去の自分に、ノーベル賞ほどの絶賛を送りました。この調子で、夏休みの友に手を伸ばしてみました。

パラパラと同じようにめくってみると、白紙の群でした。さながら、夏休みお父さんと一緒に食べたかき氷の氷のようでした。しかし、そこには、お父さんの優しさや思い出はありません。ボールドもびつくりな位真っ白です。たかしくんは、過去の自分を褒めた自分が憎いと思えました。たかだか日記に踊らされ、と悔しくて悔しくて床を殴りました。痛かったので一回で止めました。

そもそも夏休みの友、ってなんだよ、そもそもお前なんかと友だちじゃねえよ、なに友だち面してるんだよ、馴れ馴れしいんだよ、友だちを困らせるような奴は友だちじゃねえよ、と誰もが一度は通り思う怒りを夏休みの友にひとしきりぶつけました。

その時思い出しました。たっちゃんです。たっちゃんの本名はたちこという訳ではありません。なんと、たかし、なのです。たかしくんと漢字が違うのですが、呼ぶときに分り辛いので差別化を図るためにたっちゃんと呼ばれていました。

たっちゃんも駄菓子屋に遊びに行った時に、たかしくんはソフトクリームを買いました。たっちゃんも、よくわからないこんにやくゼリーもどきのような色付きの細長いゼリーを買ってました。

たかしくんは浮かれていました。ソフトクリームにも踊らされていました、所詮小学四年生、まだまだお子様です。ソフトクリームのちからの前には無力です。

そうして、浮かれたたかしくんは段差につまづいて、たっちゃんの服に思い切りソフトクリームをつけてしまいました。たかしくんは、内心『*クソクソクソクソクソクソク*』と全力で叫びながら表面上では謝りました。たっちゃんは少し困った顔をしながら、「いいよ、ぼくたち友だちだから」と許してくれました。そして、ソフトクリームのせいで、彼の着ていた服こそセーターは洗濯機に放り込まれ縮んでしまいました。そのセーターはお婆ちゃんが最後にたっちゃんのために編んでくれたセーターだったと知ったのは少し後でした。当時は、真夏にセーターなんて頭おかしいんじゃないの？ 等と黙っていたたかしくんでしたが、その時ばかりは心の底から反省しました。

そうです、友だちを困らせるのが友だちじゃないのであれば、自分はもうたっちゃんの友だちと言えないのです。友だちとは、相手がたとえ困らせてくるようなことをして来ても、受け入れてくれる存在のことだと、たかしくんは気付いたのです。

もう一度夏休みの友を見つめます。もう、たかしくんの心の中には、先ほどのような責める言葉はありません。

たかしくんは、夏休みの友を手に掴むと、リビングへ降りて行きました。その顔に迷いはありません、成長した男の顔でした。

凜々しい表情を保ちながら、たかしくんはリビングに置いてある家族共用のパソコンを立ち上げました。そして、GoogleのHPを開くと、慣れない手つきで、『夏休みの友 答え』と打ち込みました。

そこには、自分と同じような境遇に追い込まれた生徒たちの、悲痛な声が渦巻いていました。結論として、そんなものはない、というところに落ち着いてしまいました。たかしくんの心は反比例のグラフのように落ち着きが消えていました。万策尽きた、と言った顔です。力なくソファに倒れこみます。

追い込まれた時に、超人的なパワーを発揮するという話ですが、たかしくんにも天命といえる思いつきが起りました。ガバっと跳ね起き、パソコンの前に再び座ります。

もうコレしか無い、と思いました。全てを込めてエンターキーを押しました。思いの外検索が出てきました。見てみると、爆破予告を行った場合に実行される刑が書いてありました。たかしくんは諦めました、小学校四年生といえど国家権力には弱いのです。

「たかしー、おひるよー」

「はーい！ ご飯なにー!?」

「素麺よー!」

腹は減っては戦は出来ぬ、とたかしくんはテーブルへ急ぎます。因みに、あの憎いカレンダーで覚えた言葉です。

「いただきますー!」

勢い良く素麺をすすります。

ああ、なんだかお腹いっぱいになったらどうでも良くなってきましたね。

満腹になると、たかしくんはソファに飛び込み昼寝を始めてしまいました。

気持ちよく夢の中にいるたかしくんは、知らないでしょう。目が覚めた後徹夜で、お母さんとお父さんに怒られながら三人で宿題をやる末路を。

夏の日の思い出。

夏の思い出

作者 たっちゃん

第四回 「俺的小説賞」 応募作品 62 掌編賞次点作品

この作品の著作権は全て作者に帰属します。
無断転載は禁止しています。